

静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果  
－平成23年度－

平成25年3月31日  
白木 賢信（東京家政大学）

I 調査結果の概要

1. 利用団体が平成22年度以降小学校相当世代に偏りつつあり、利用宿泊数は「1泊」と「2泊」の占有率が高いまま推移している。

利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12歳」が5ヶ年とも最も比率の高いカテゴリであることは変わらない。但し、平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、平成22年度以降は再び小学校相当世代に偏りつつある。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」の占有率が高いまま推移している。

2. 利用目標が最も比率の高い「自主性や協調性、社会性を身につける」が突出してきており、利用目標の達成度は「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が全体の9割を占めている。

利用目標とその達成度について、5ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標で、この比率が突出してきている。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どで全体の9割を占めている。

3. 利用後の参加者の変容は、上位3項目の「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」が年々順位を入れ替わりながら推移している。

利用後の参加者の変容について、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位3項目は5ヶ年とも変わらないが、その順位は年々入れ替わっている。

4. 繰り返し利用することによって予想される変容は、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が4年間順位を変動しながら上位項目で推移している。

繰り返し利用することによって予想される変容については、上位項目は4ヶ年とも変わらず順位を変動させながら推移しているが、第4位の「仕事などを積極的にするようになる」が1ポイント差まで接近している。また、平成22年度以降は「利用後の参加者の変容」と連動した順位となっていない。

## II 調査の概要

### 1. 目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示するが、昨年度に引き続き、平成19～23年度の5年間における経年変化の傾向もあわせて提示することにしたい。

### 2. 内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

- (1) 利用団体の種類
- (2) 利用団体の主たる年齢層
- (3) 利用宿泊数
- (4) 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
- (5) 利用目標の達成度
- (6) 利用後の参加者の変容
- (7) 繰り返し利用することによって予想される変容

### 3. 対象

平成23年度のセンター利用団体

### 4. 方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は下記の通り。

- (1) センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
- (2) 各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

### 5. 調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率） 128（25%） 有効回収率 128（25%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成23年度における統計上のセンター利用団体数（505団体）を母数としている。

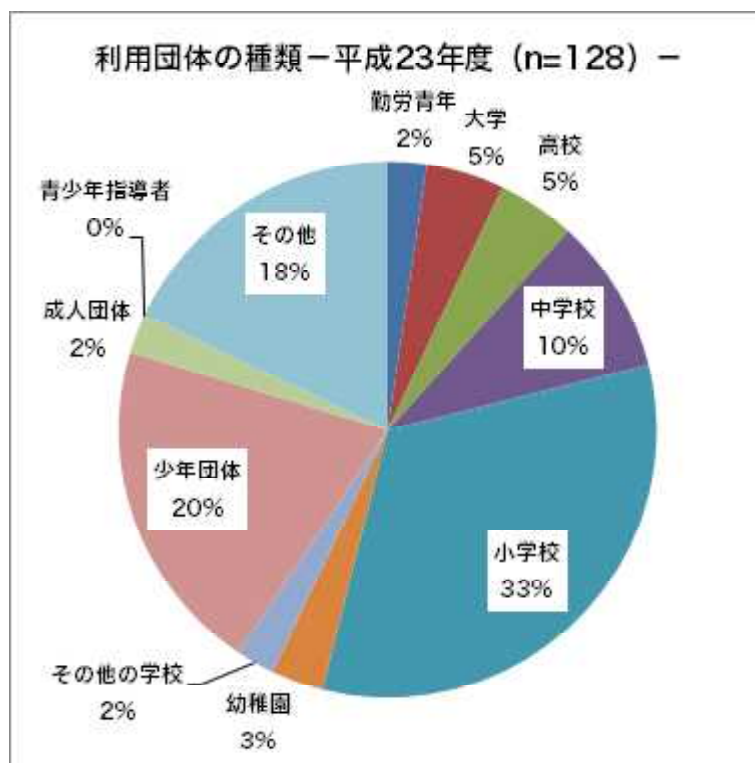
### 6. 実施期間

平成23年4月～平成24年3月

### III 調査の結果

#### 1. 利用団体のプロフィール

ここでは、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが(図1)、最も比率が高いのは「小学校」の33%で、次いで「少年団体」の20%、「その他」の18%が続いている。なお、学校関係は58%で全体の6割近くを占めている。



「その他」の内訳 (括弧内の数値は実数)

子ども会(2)、スポーツクラブ(2)、特別支援学校(2)、会社、学童保育、空手団体、教会学校、行政主催の研修、児童クラブ、山岳協会、社会教育主事講習、社会教育団体(少女)、週末に主催事業として参加した者またその指導スタッフ等、障害児童支援団体、知的障害者施設、乳幼児から高齢者までのファミリーグループ、富士宮市教育委員会(近江八幡市・富士宮市交歓会)、武道教育団体、ボーイスカウト(知的障害者)、放課後児童クラブ、民生委員協議会、幼児教育団体

図1 利用団体の種類

この利用団体の種類の平成19～23年度間の変化について示したものが図2である。これによると、「小学校」の比率は平成19年度から21年度にかけて年々低くなっていたが、平成22年度からは上昇に転じて、今年度では全体の約1/3を占めている。次いで比率の高い「少年団体」は、平成20～22年度の間は年々比率が低くなっていたが、今年度で6ポイント高くなっている。一方、「中学校」は前年度から6ポイント低くなっている。

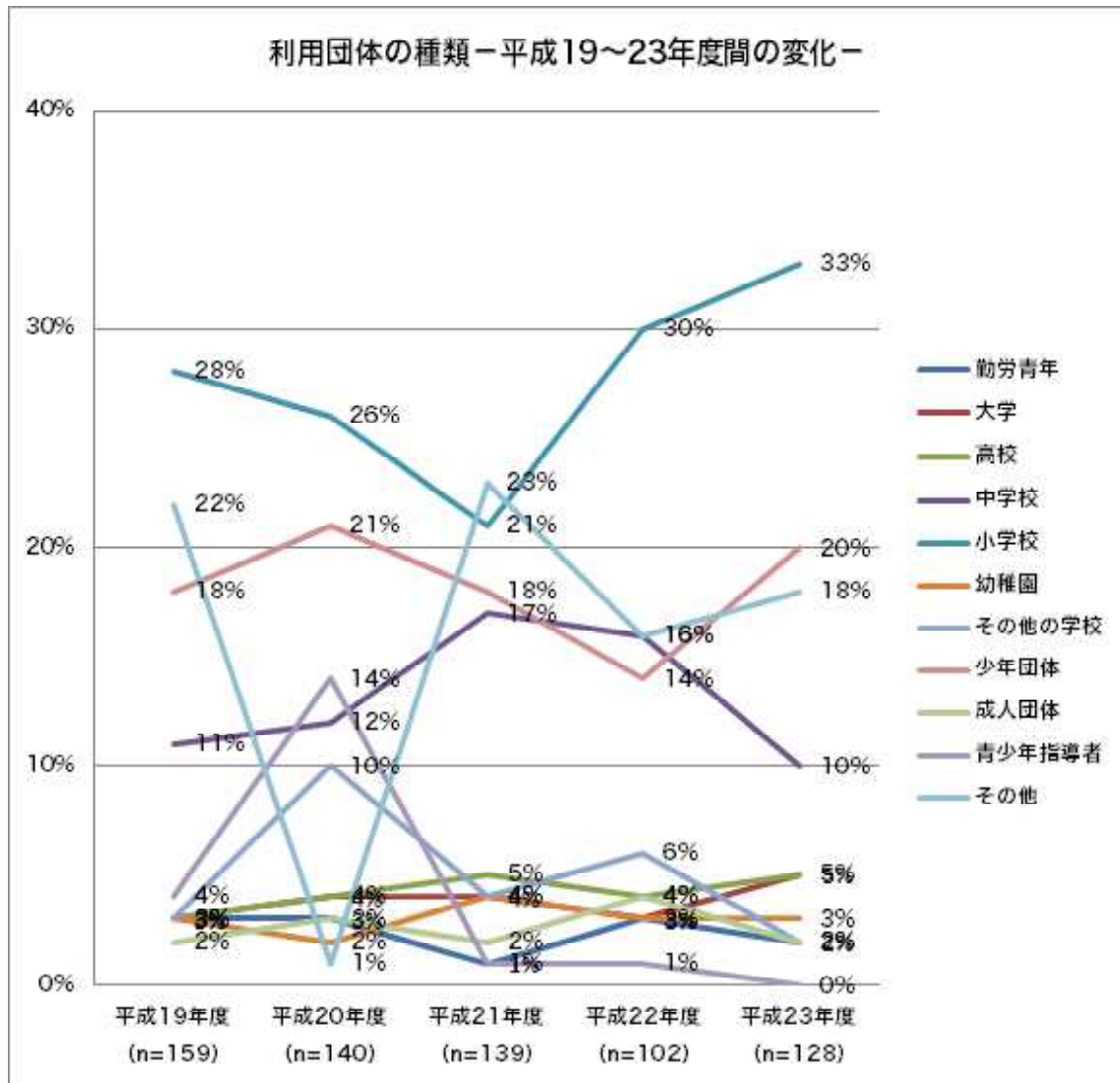


図2 利用団体の種類－平成19～23年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図3）、「7～12歳」が61%で最も高く全体の6割以上である。次いで高いのは「13～18歳」の20%である。

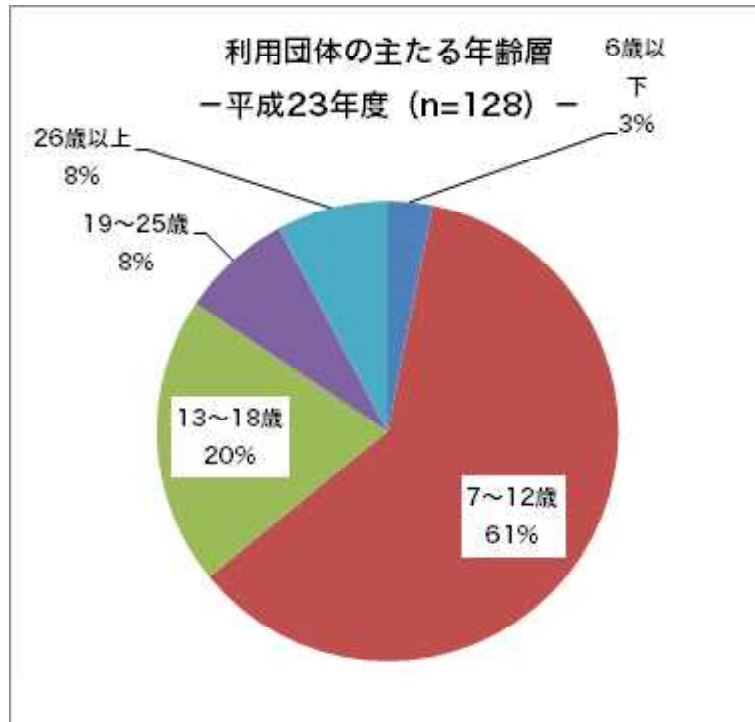


図3 利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を平成19～23年度の変化で見ると（図4）、今年度最も比率の高い「7～12歳」は5ヶ年とも最も高い比率で、今年度において最高比率に達している。一方、「13～18歳」の比率は平成21年度までは年々高くなってきたが、平成22年度からは低下に転じている。なお、その他の年齢層はほぼ横ばいで推移している。

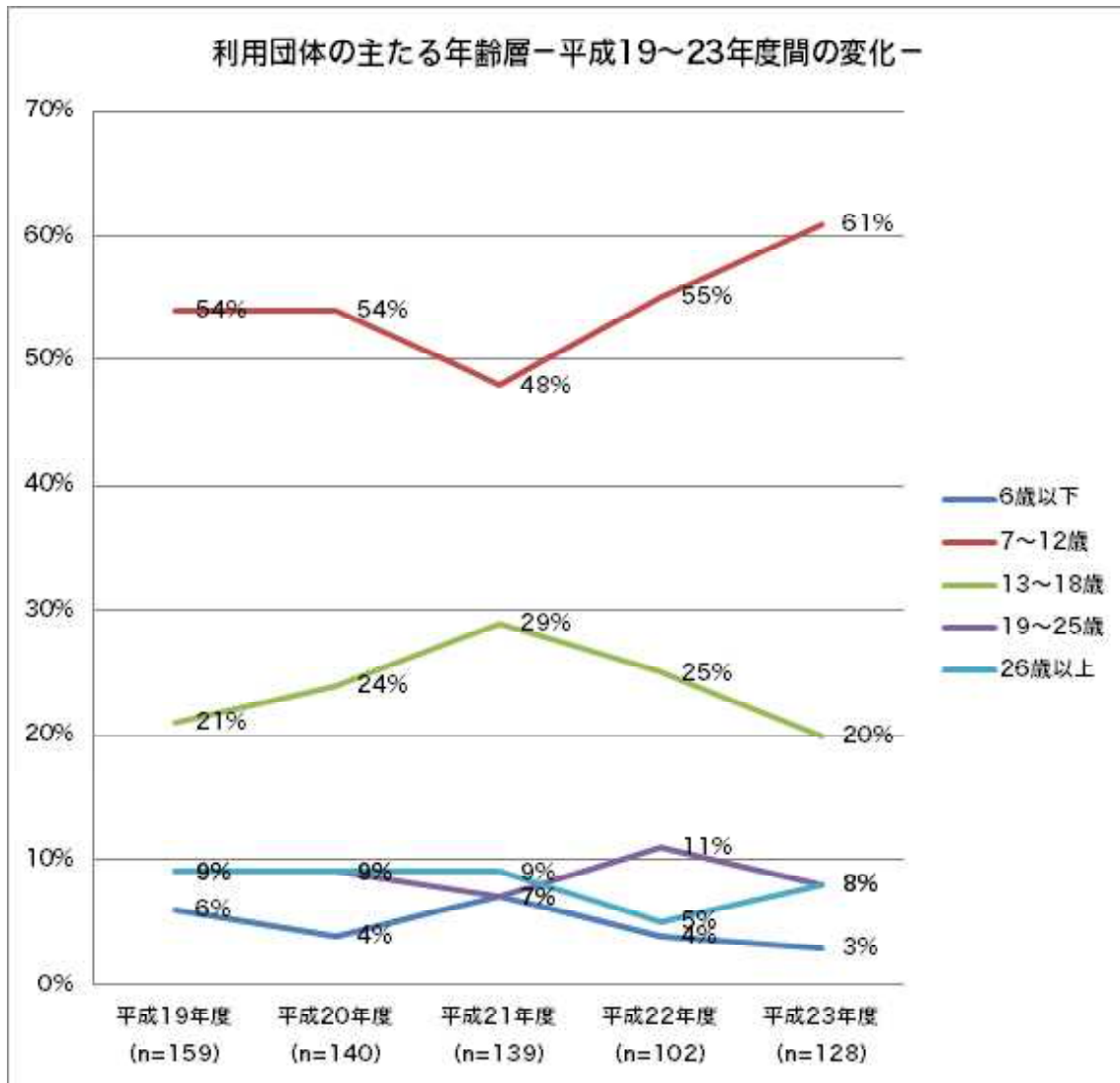


図4 利用団体の主たる年齢層－平成19～23年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5）、「1泊」の比率が最も高く（45%）、次いで高い「2泊」（41%）の比率と合わせると、全体の9割近くとなっている。

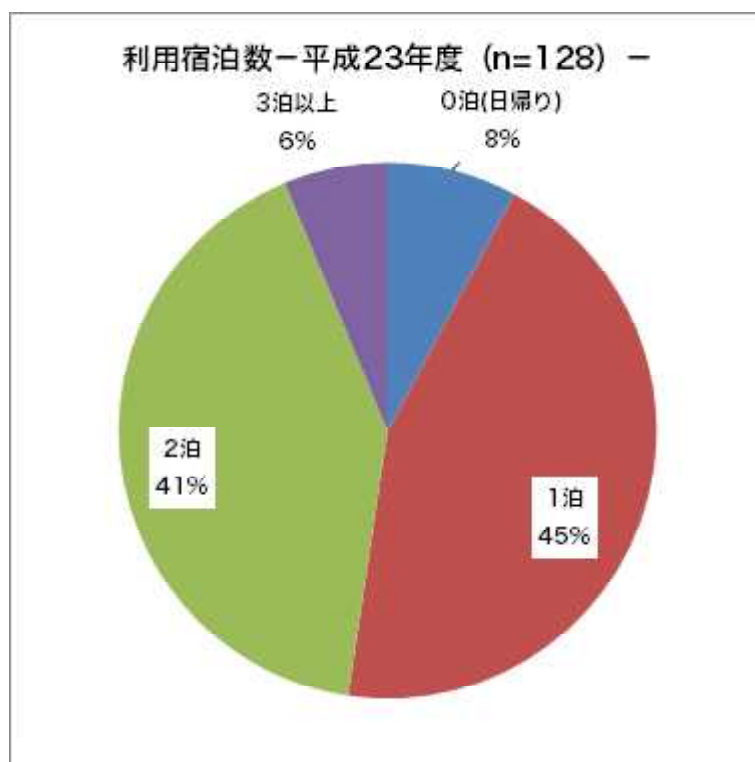


図5 利用宿泊数

この利用宿泊数を平成19～23年度間の変化でみると（図6）、今年度になって「1泊」と「2泊」の占有率が若干低くなったが依然8～9割の間で推移している。「0泊（日帰り）」の比率はそれぞれ年々低くなっているが、「3泊以上」は今年度で高くなっている。

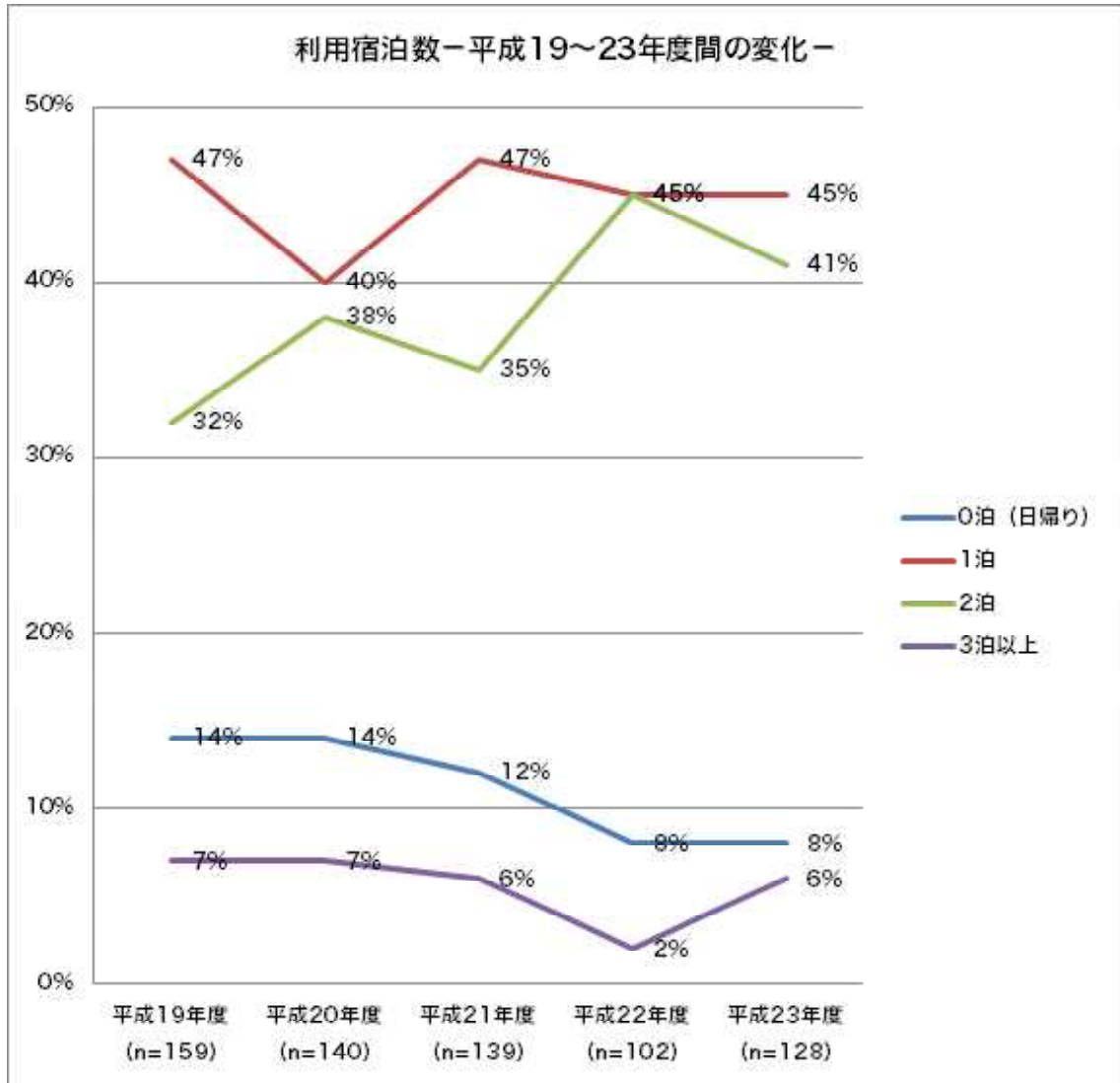


図6 利用宿泊数－平成19～23年度間の変化－

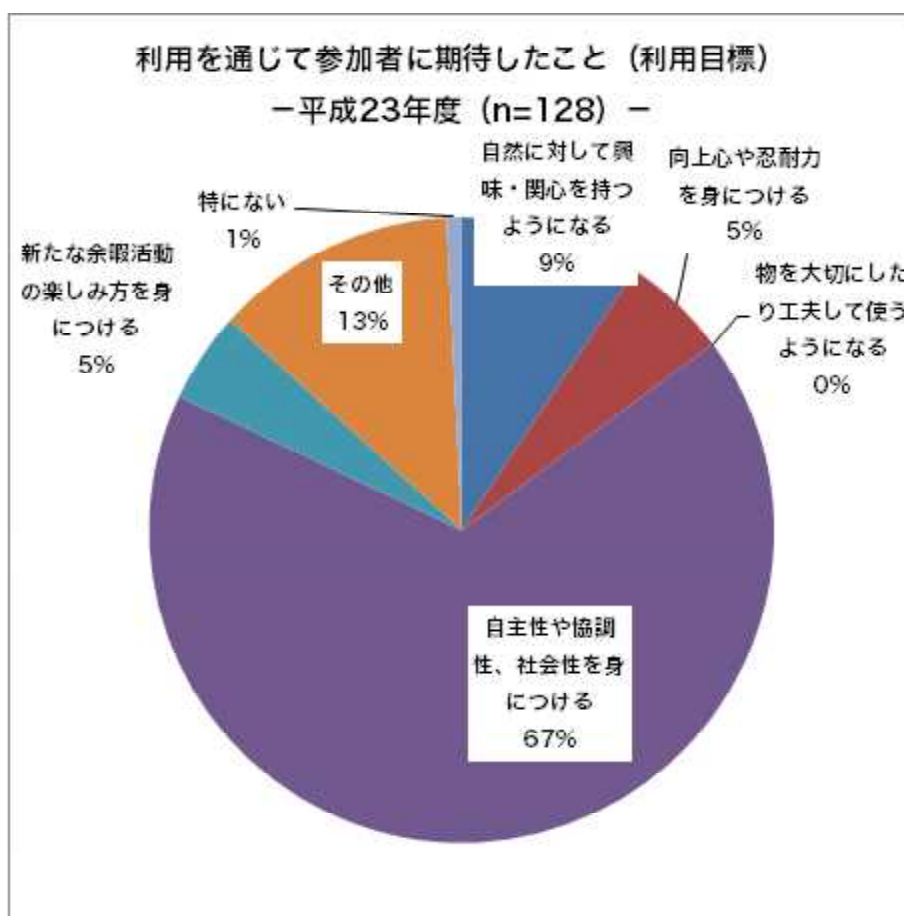


## 2. 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成25年3月31日現在）。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm)

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」の67%で全体の2/3を占めている。次いで、「その他」（13%）、「自然に対して興味・関心を持つようになる」（9%）が続いている。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

親子、他地区との交流。企業経営における学習。技術向上。規律正しい生活習慣を身につけさせることを期待して実施しました。研修。今回は勉強合宿として施設を利用させていただきました。自分を見つめる機会とすること。少年野球チームの卒団式。職場をはなれ、リラックスできる自然の中で、仲間と協力し行動できる。スケートがすべれるようになる。スケート技術向上。スケートに親しむ。聖書教育とレクリエーション。同期の交流、親睦を深める。普段体験できないような活動を体験する。ふだんでできないスケートを体験させたかった。プラネタリウムを楽しむ。自ら気づき、考え、行動できる。

図7 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の平成19～23年度の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は5ヶ年を通じて最も比率の高い項目であるが、次いで高い項目については、平成19年度の「その他」（17%）、平成20年度の「自然に対して興味・関心を持つようになる」（12%）、平成21年度の「向上心や忍耐力を身につける」（13%）を経て、平成22年度（14%）および今年度（13%）は「その他」へと変遷している。

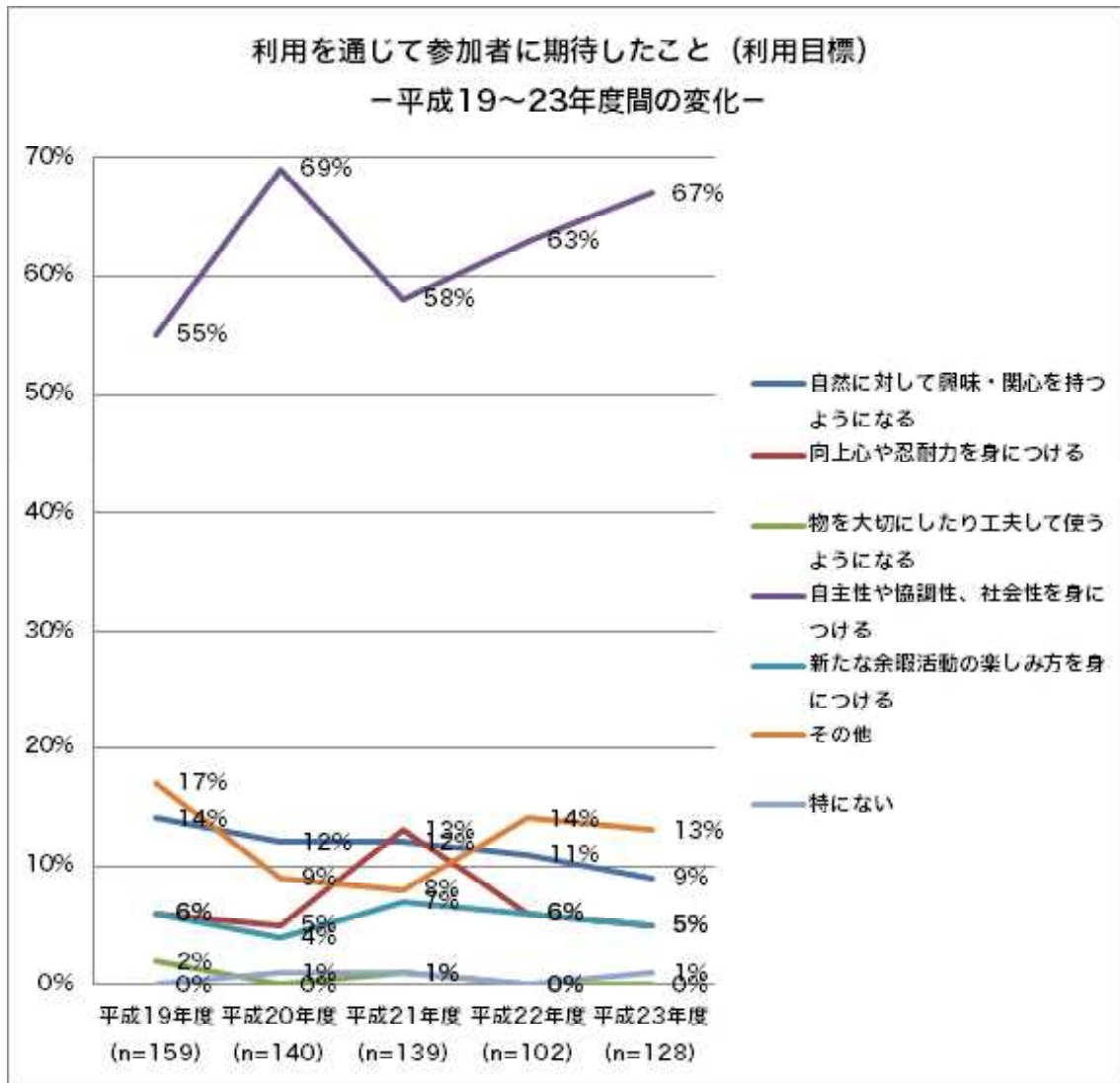


図8 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～23年度間の変化－

### 3. 利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身が判断した。

その結果、図9のように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（81%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の13%となっている。

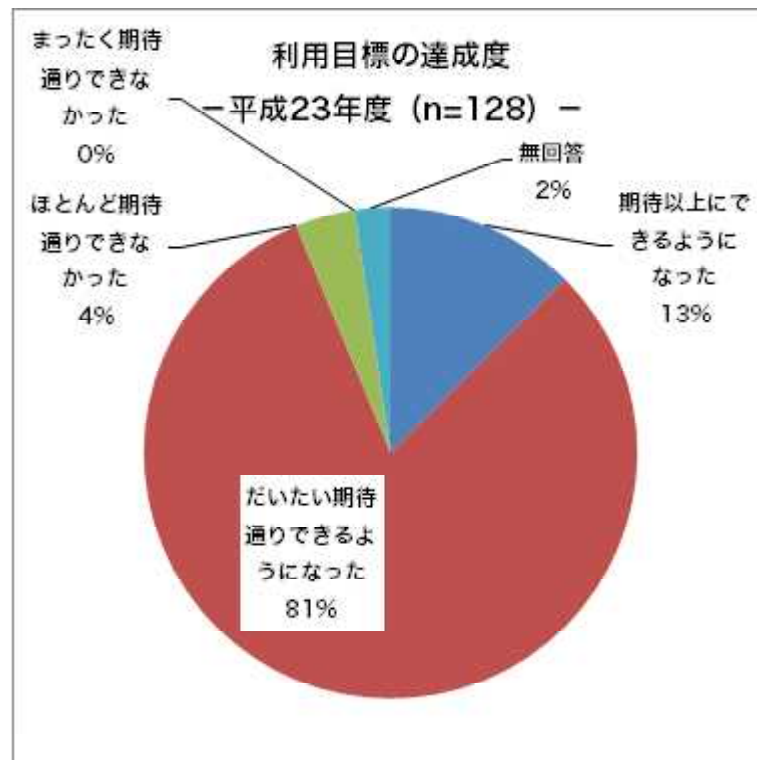


図9 利用目標の達成度

この達成度の平成19～23年度の変化については（図10）、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は5ヶ年を通じて90%を超えている。その内訳をみると、「期待以上にできるようになった」の比率は平成21年度から徐々に低くなっており、今年度はこれまでで最も低い比率となっている。

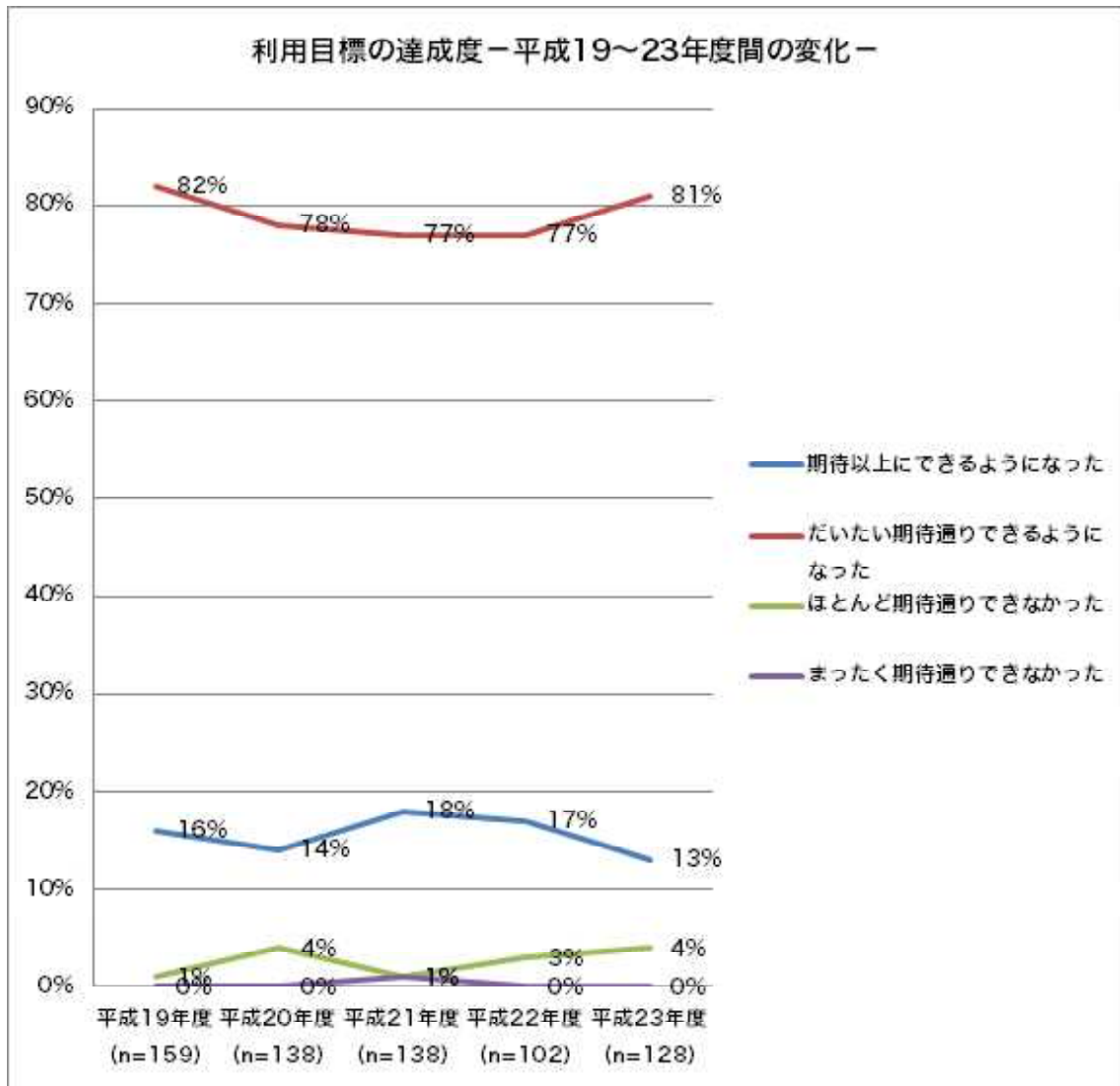
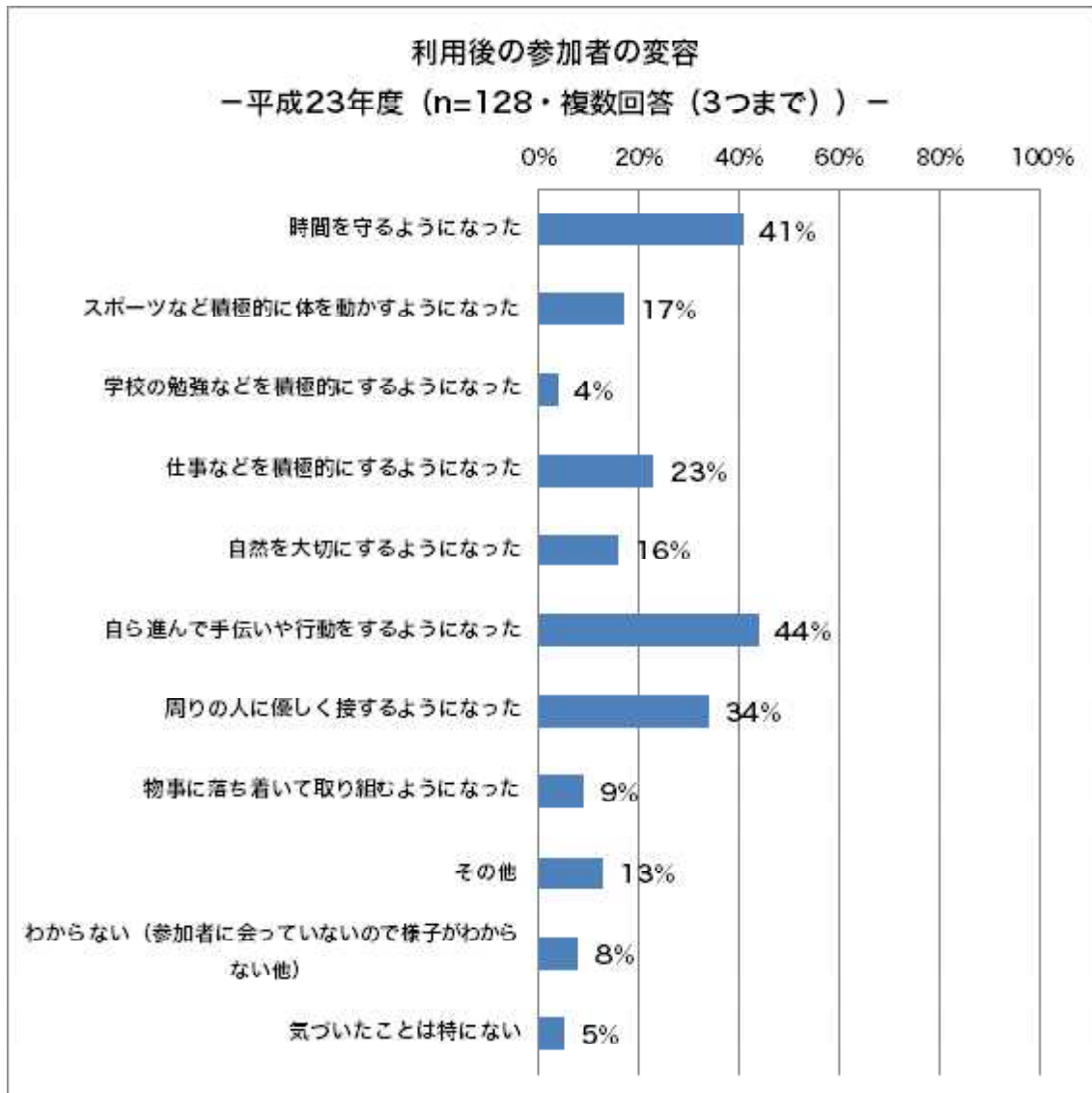


図10 利用目標の達成度－平成19～23年度間の変化－

#### 4. 利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が最も高く44%、次いで「時間を守るようになった」（41%）、「周りの人に優しく接するようになった」（34%）が続いている（図11参照）。



「その他」の内訳 (括弧内の数値は実数)

あいさつを進んでできるようになった。お互い、声を掛け合うようになった。思い出づくりをふまえて、前進している様子がうかがえます。給食を残さず食べようとする。協力して取り組めるようになった。組としてのまとまりがさらに強くなった。今後、中長期的に成果が各社で表れる。自己洞察力が高まってきた。“社会人としての振る舞い”を意識して行動できるようになった。集団にまとまりがでてきた。

「食」について意識して食べたり、考えたりするようになった。職場の仲間で、いっしょにがんばる連帯感が強まった。自立心が育つきっかけとなった。相互理解が深まった。そのまま夏休みに入ってしまったので、2学期がたのしみです。確かな信仰の成長。班でのおしゃべりが増えた。保護者方より感謝の御言葉を数多く頂きました。

図11 利用後の参加者の変容

この平成19～23年度間の変化について (図12)、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」は5ヶ年通

じて上位3項目で変わらない。これらのうち、「時間を守るようになった」は、平成21年度では3位に落ち込んだが、平成22年度以降は40%台となっている。また、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」は前年度から13ポイント高くなっている。なお、「わからない(参加者に会っていないので様子がわからない他)」は平成19～20年度は10%台であったが、平成21年度以降は1ケタ台の比率で推移している。

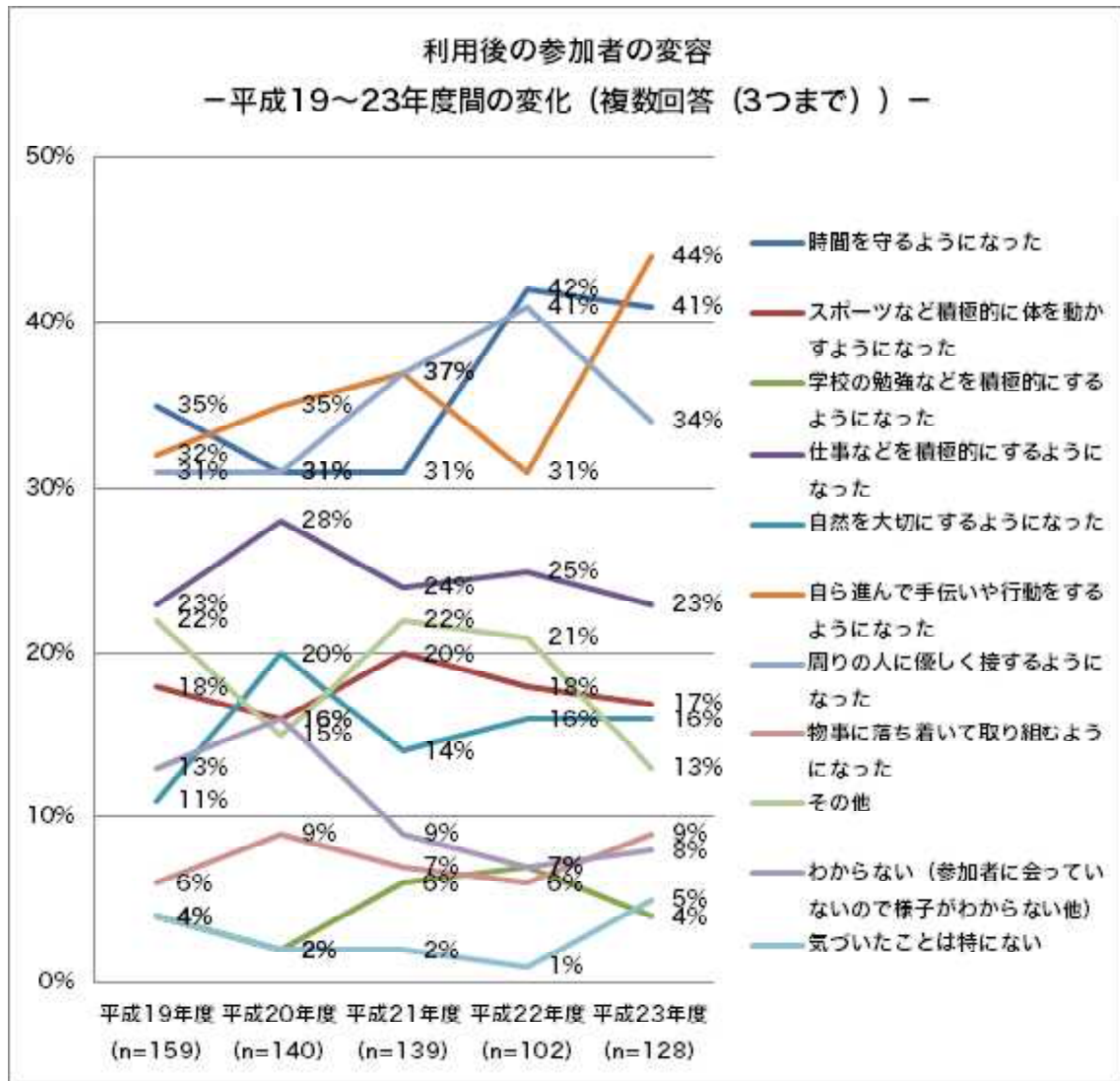
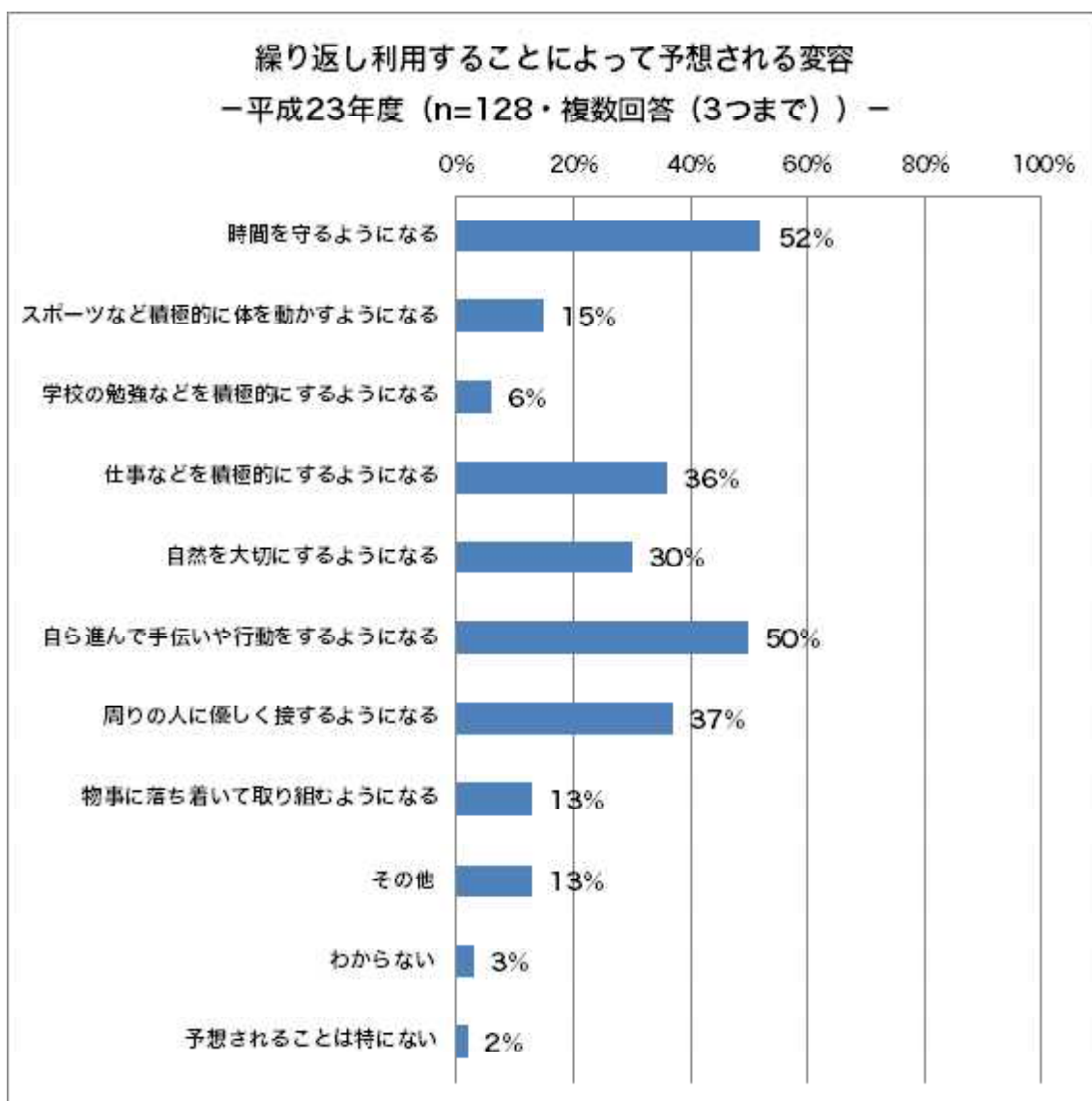


図12 利用後の参加者の変容—平成19～23年度間の変化—

### 5. 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えることにした(複数回答・3つまで)。その結果(図13)、「時間を守るようになる」が最も高い比率で52%、次いで「自ら進んで手伝いや行動をするよ

うになる」(50%)、「周りの人に優しく接するようになる」(37%)である。



「その他」の内訳 (括弧内の数値は実数)

各社の発展。協調性が養われる。協力することの大切さを知り、仲間を大切にようになる。規律ある行動、生活習慣など基本的なものを身に付けさせたい。研究する。自己洞察力が高まり、他者との関係がよくなる。自己の生き方、あり方について考える。自分のことを自分でやろうとする。自分のすべき事がしっかり身につく。宿泊を通して、より仲間づくりを深めることができます。状況に応じた行動ができる。聖書に対する正しい姿勢。多様な人材の中で協調して助け合って生活するようになる。友だちとの関わりが深くなる (声かけがふえる)。仲間 (同期) 同士で指摘し合って取り組むようになる。仲間と協力できるようになる (雨で朝霧探検隊、サイクリングができなかったので、やったとしたら)。勉強熱心になる。星に興味を持つ。毎年の研修が、就職時の職場選択上、売りになっています。元々時間にもとてもしっかりしていましたが、ひとまわり大きくなったように思います。ローコストにより、予算的にも円滑に企画が進められます。

図13 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は平成20年度調査から加わった項目であるため、図14の通り4年間の変化であるが、それによると4ヶ年とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。但し、「周りの人に優しく接するようになる」は平成21年度から16ポイント低下させたこともあり、第4位の「仕事などを積極的にするようになる」が1ポイント差まで接近している。また、3項目間の順位は変動しながら推移しているが、平成22年度以降は「利用後の参加者の変容」と連動した順位となっていない。

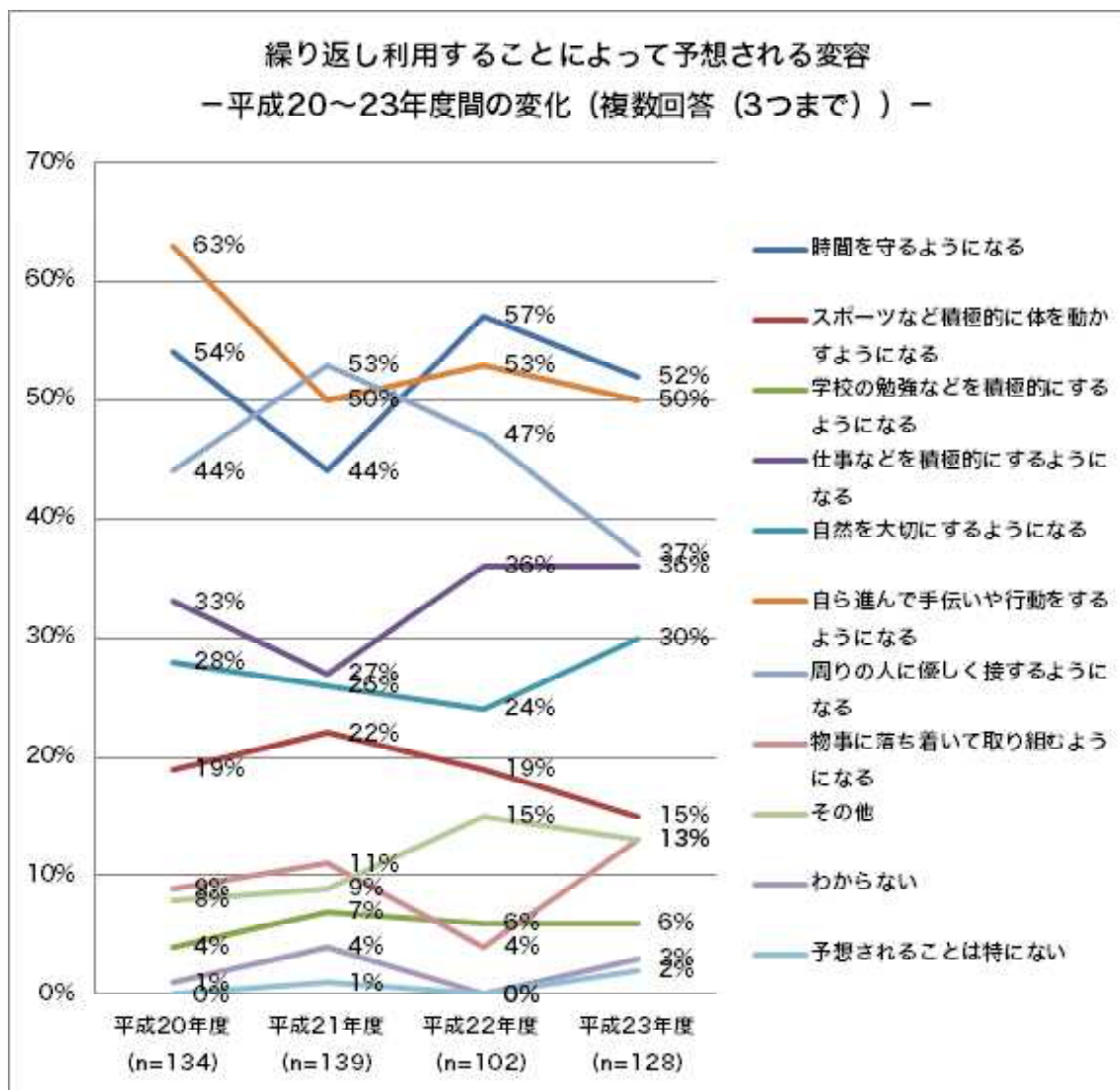


図14 繰り返し利用することによって予想される変容－平成20～23年度間の変化－



#### IV 調査結果のまとめと今後の課題

今回の調査結果は、次の4点にまとめることができる。

第1に、利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12歳」が5ヶ年とも最も比率の高いカテゴリであることは変わらない。但し、平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、平成22年度以降は再び小学校相当世代に偏りつつある。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」の占有率が高いまま推移している。

第2に、利用目標とその達成度について、5ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標で、この比率が突出してきている。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どで全体の9割を占めている。

第3に、利用後の参加者の変容について、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位3項目は5ヶ年とも変わらないが、その順位は年々入れ替わっている。

第4は繰り返し利用することによって予想される変容についてであるが、上位項目は4ヶ年とも変わりなく3項目の順位を変動させながら推移しているが、第4位の「仕事などを積極的にするようになる」が1ポイント差まで接近している。また、平成22年度以降は「利用後の参加者の変容」と連動した順位となっていない。

最後に今後の課題について述べると、第1は、調査4年目（平成22年度）以降、過去3ヶ年の変化傾向から新たな傾向が現れている。これが果たして今後どう推移していくのか追究していく必要があるが、その際、この傾向が利用団体のプロフィールとも連動している可能性がある。この追分析を行いつつ、センターの環境条件等の要因分析も組合せることが期待される。

第2は、今回若干持ち直したが、依然回収率・有効回収率が依然20%台に留まっているので、効率的な回収の方策を検討するとともに、利用団体にもこのような調査活動への理解を得ることが求められる。